

## プロローグ

虹村形兆が青葉祈を殺さなかったのは、形兆にとって彼女が有益だったからだ。

その『家』の購入資格は二十五歳の健康な人間で、しかし形兆は当時十七歳。

二十五歳の健康な人間の身分証。姉の運転免許証を盗み、姉に成り代わり、虹村形兆に代わって交渉の矢面に立てるのが祈だけだった。それだけの話だ。

だから虹村形兆は彼女に友情など感じず、利害関係でのみ彼女を生かした。

——“そこ”は四方を山と森に閉ざされた、十一軒の集落だった。送電線もなければ、外界へとつながる道もない。こう書くともまるで限界集落のようだが、実態は大きく異なる。

一軒一軒が八百坪以上の豪邸なのだ。

広大な庭にヘリコプターの発着場、プール、テニスコートを備える家が十一軒。

驚くべきは、村に畑がひとつもない点だ。村そのものが外界から遮断されているにもかかわらず、自給自足を一切行わない。

必要なものはすべて自家用ジェット機で調達する。金持ちだけが住まう村。

だから形兆は、この奇妙な村を勝手に『富豪村』と名付け、そう呼んだ。自らの境遇の成り立ちを、不死の肉塊と化した父の「本当」の始まりを求め、救いを求めて——訪れた。

「なあ兄貴イ〜〜〜なんでこんな山奥に伊勢丹があるんだよ〜〜〜？ 十一軒しか家がねえのにデパートがあるなんて奇妙だよな〜」

山奥の村にそびえる巨大な百貨店を見上げ、虹村億泰が怪訝な声をあげた。本店よりも大きいのではないか、と思わせる百貨店は、山奥の村には不釣り合いに見える。話しかけられた形兆は、周囲を見渡して警戒態勢を取っている。足元に彼のスタンダードが発現していることに気づき、踏みそうになった億泰が慌てて足を上げた。

「な〜兄貴ってば〜」

「……自家用ジェット機で移動できるって言っても、ちょっとしたもんは近場でそろえたいんだろ。十一軒しか家はねえって言っても、全員が全員大企業の社長だ。伊勢丹もご機嫌はうかがっておきたいところだろうぜ」

虹村形兆がしぶしぶ口を開いた。眉間に深く刻まれたしわが生きてきた月日の重さを思わせる。ひどく老成した雰囲気のある少年だ。

形兆はズボンのポケットから携帯電話を取り出した。PHSよりも電波がよく入り、

六十四文字分もメールが送れる最新型だ。

「奇妙ってんなら、送電線もねえのに携帯の電波は通ってるってのも奇妙だぜ。――

おい、準備はいいか？」

形兆は振り返り、背後でぜえぜえと息をする少女――青葉祈を見下ろした。急に話の矛先が向き、祈はたじろいでまばたきをした。虹村形兆は不機嫌そうに眉根を寄せ

る。  
「お前が居ないと『屋敷』に立ち入れない。しっかりしろ」

「わかってるなら、少しは労わってよね」

「ああ？」

「……なんでもないよ」

ぎろりと睨まれ、祈は大きなため息をついた。まったく威圧的な態度だ。

虹村形兆は祈よりも二歳歳年下だったが、年の差を形兆は一切気にしない。祈に対して表面を取り繕う必要性を感じていないのだ。

祈はスポーツドリンクを飲み干した。何時間もかけて道なき道を登山し、へとへとなのは彼女だけだ。

「言っておくけど、あの屋敷とアポ取ったの私なんだからね」

「だからしゃんとしろと言ってるんだ」

「わかってるよ。形兆くんの……お父さんのためだもんね」

「——ああ」

形兆は、目的地である屋敷をねめつけながら言う。

村の中央にそびえる、ひととき大きな屋敷が彼らの目的だった。大きな屋敷、といっても高い塀が囲っているため、なかは見えて取れない。塀を一回りするだけでもかなりの運動になる。この村のどの家よりも大きいのだ。

十一軒の家の中のひとつ。空き家を売りに出している者の屋敷だ。形兆たちは空き家の購入希望者を装い、主人との面会の予約にこぎつけた。

折は門の前でジャケットを脱ぎ、内側に折りこんで腕にかける。見れば、形兆も同じようにジャケットを脱いでいた。

几帳面な形兆であるので、マナーには詳しいらしい。

「億泰、わかってると思うが、お前は近くに待機してろ。なにかあればバッド・カンパニーで指示を出す」

「了解。つつつても、バッド・カンパニーの射程距離よりも屋敷のほうが広いよな。まあ携帯で連絡とればいいかあ」

「じゃあチャイム押すね」

呼び鈴を押すが、応答がない。

祈が首を傾げる。

「壊れてるのかな？」

「よせ、何回も押すもんじゃねえ。それに、呼び鈴が壊れてる豪邸なんかあるか？  
すぐ修理するだろ」

その時だった。

門の中から、大きな物音が聞こえてきた。

どたどたとなにかが暴れまわり、物を壊すような音が響いてくる。

「ああああああっ！ チクシヨオーツ！ よくもツサト子をツ！」

男の叫びが、三人のもとまで聞こえてくる。祈と億泰は互いに顔を見合わせた。

「どうしよう……取り込み中？」

「入ってみるかあゝっ？」

「待て。まずは様子を見てからだ」

門を開けようとする祈を、形兆が制した。足元に自らのスタンド——バッド・カンパニーを発現させる。

「偵察しろ」

形兆の指示で、小さな軍隊は屋敷のなかに侵入していく。  
バッド・カンパニーがまず視界に入れたのは、広々とした日本庭園の姿だ。

整備された苔が敷き詰められた地面に、屋敷までの道筋と池への道を示して二股に分かれた石の通路がある。植えられた松の木や石灯籠が風情を出している。

こんな非常事態でなければ、ゆったりと散策したい場所だ。

バッド・カンパニーは事務的に進軍していく。

玄関前の石畳で、血走った目の男が、ぐったりとした様子の女を抱き抱えていた。女は目をつむり、眠っているようだ。女の様子を見下ろした男が、ぐっとこぶしを握る。

「もう屋敷なんていらねえ！ だからサト子を返せッ！ 今すぐに！」

「落ち着いてください、春原様」

すぐそばにいた少年が言った。背は低く、声は高い。声変わり前の少年だ。

十二歳ほどの幼い外見とは裏腹に、冷ややかなほど慇懃な態度だ。

「マナーに寛容はございません。ひとつ得るか、ひとつ失うかです。再び“トライ”致しますか？」

少年は淡々として言う。

マナー。寛容。トライ。この場にはそぐわない言葉だ。

形兆は直感する。

この手の奇妙な口ぶりは、なんらかの能力を持つスタンド使い特有の喋り方だ。

「ああああああああっ!! もういい! 殺す! 殺してやる!!」

男が頭を掻きむしり、懐からナイフを取り出した。

叫びを聞いた祈が、意を決して門を開ける。

「いったいなにが起きてるの? 形兆くん!」

「なにかあればバッド・カンパニーで止めるさ。億泰! 念のためお前も来い!」

「おう!」

三人は門から屋敷への道を走る。広い石畳を抜け、屋敷の玄関へとたどり着く。

血走った目の男が、スーツ姿の少年の胸倉を掴み、喉元にナイフを突きつけている。

形兆の傍らで、祈が息を飲んだ。

男は形兆たちがやってきたことにも気づいていない。怒りのあまり、こめかみに血

管の筋が浮き出ている。

「最後に一回だけチャンスを与えてやる……サト子を返せ。そしたら命まではとらな

いでやるからよお〜〜」

少年は、一切動じる様子がない。

「ナイフを向けて替すなど、相手への敬意に欠けるはなはだ無礼な行為。そのような

者がなにかを得られるはずがない」

喉元のナイフが、真横に引かれた。

真つ赤な血を花火のように吹き出しながら、少年の身体が地面に落ちる。

返り血を浴びた男は、地面に血だまりを作る少年を見てけたけたと気の狂った笑みを浮かべた。

「ざまあみやがれ！ この田吾作があゝ〜！ なにが山の神だ！ こうやってナイフで切れば死ぬんじゃねえか！ ヒヤハハハッ！ ——うぐっ」

男の笑い声が、呻きと共に不自然に途切れた。

男の身体がぐらりと揺れ、地面に倒れこむ。血だまりがびしゃんとしぶきをあげた。血の匂いが形兆たちのもとまで届いたのは、ちょうどその時のことだった。

「兄貴イッ！ これ、スタンド攻撃か……？」

「スタンドの像らしきものは見えなかったが……」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

いち早く祈が動いた。少年に駆け寄って、膝をつく。

取り出したハンカチを少年の首元に当てるが、流れ出す血ですぐに赤く染まってしまふ。

「けっ、形兆くん、救急車呼んで！」

「——その必要はございません」

少年が目を開けた。むくりと起き上がると、黒々とした瞳を祈と合わせる。



起き上がったことが信じられなくて、祈は思わず目を見開いた。

「別荘購入の件でお話を頂いていた、青葉ユキ様でございますね」

「え？ あっ、ああ……はい、そうです！ 青葉ユキです」

形兆は頭を抱えそうになった。『ユキ』という名前は祈の姉のもので、彼女の本名ではない。とっさに返事ができるようにしておけと言い含めておいたのに、これだ。

だが仕方がない。スタンド使いになって間もない祈に、異常事態への対応力を期待するだけ無駄な話だ。

混乱する祈とため息を我慢する形兆を尻目に、少年は自らの首筋にあてられたハンカチに視線を落とした。血で染まっている。

「申し訳ございません、汚してしまいました。こちら、お預かりいたします。お帰りまでにクリーニングしてお返しいたします」

「へ？」

「正門からの案内人を務めております、『一究』と申します。大変お見苦しいところをお見せしてしまい、誠に申し訳ございません」

「え？ いや……」

なにも言えない祈を置いて、ハンカチを懐にしまった少年は立ち上がる。祈の手を取って立ち上がらせて。

少年は改めて謝罪のために頭を下げ、言葉を続ける。

「呼び鈴が鳴ったことには気づいていたのですが……。お客様をお待たせしてしまふなど、到底してはならない無礼な行為。重ねて、誠に申し訳ございませんでした」

「ああ……。いえ、い、いいんです。こちらこそ勝手に立ち入ってしまったし訳ありませんでした。お怪我もなくなによりでございます……。？」

祈の言葉はじよじよにしぼみ、疑問形になった。助けを求めるように形兆を横目で見やる。

パニックになるのも当然だ。

ナイフで切り付けられた少年の首筋から、傷が消失しているのだから。

会話を聞きながら、形兆は倒れた男に歩み寄った。肩を引っ張って仰向けにする。

白目をむいて、泡を口から吹いている。口元に耳を近づけるが、呼吸音がしない。脈拍もない。

「その方の手当てはこちらで手配致しますので、どうかお触りにならぬよう」

「脈もなきや呼吸をしてないようだが？　今すぐ救急車を呼んだほうがいいんじゃないかねのか」

「はい。屋敷に医者がおります。お客様がお手をわずらわせる必要はございません」  
形兆は眉根を寄せた。

屋敷に大人がいるのなら、ふつう騒ぎが起きた時点で出てくるはずだ。屋敷に医者  
がいるのかも疑わしい。

だが形兆は、そうかよ、と頷くとあっさりと引き下がった。

「兄貴、いいのか？」

億泰が眉をひそめて、スタンドを介して形兆にささやく。億泰の困惑ももつともで  
あるが、ここで相手を刺激するのは得策ではない。

倒れている男は形兆の知り合いではない。他人がどうなるうが知ったことではな  
かったし、この場で戦闘になって困るのは形兆のほうだ。

「それでは改めてご案内させていただきます。どうぞこちらへ」

少年は何事もなかったかのように、血に染まったスーツのまま玄関のなかへと三人  
を招いた。

異常な状況の連続に、祈が泣きそうな顔で形兆を見た。形兆は首を振って、後退し  
ようとする祈の背中を前に押し出した。

「形兆くん、私、やっぱり」

「だめだ。——おれたちはもう、許可もなく敷地内に立ち入るってマナー違反を犯し  
てる。そのうえ、アポ取っというやっぱり帰りますなんて言ったら、なにがどうなる  
かわかんねえぞ」

形兆は倒れている男を顎で示した。男は突然泡を吹いて倒れ、一方ナイフで致命傷を負った少年はけろりとしている。

スタンドの像は見えなかったが、スタンド能力によるもののは間違いない。

屋敷の主はマナーにうるさく、敬意を重視する人間だとは事前に聞いていた話だが……よもや、マナー違反で死の危険が出てくるとは思いもしていなかった。

とはいえ。形兆は思い直す。

元々マナー違反を犯す気などはなかったのだから、大した問題ではないはずだ。

「祈、お前が言ったんだ。この富豪村におやじが化け物になった理由がある」と

「……そうだけど……」

後退を許さない形兆の態度に、根負けした祈はため息をついた。

意を決したように頷いて、一究に向き直る。

「今回、別荘購入の件でお時間をいただきありがとうございます。改めて自己紹介させていただけます。私は——」

祈の言葉を聞きながら、形兆は発現させていたバッド・カンパニーを静かに消滅させた。

招かれてもいない屋敷の深部に無遠慮で立ち入ることも、当然、マナー違反に違いないからだ。

形兆に戦う意思はない。

だからあえて、スタンドを発現しない。

形兆は生身の男として、屋敷のなかに——胃袋のなかに、飛び込んでいく。

「お、おれも行かなきゃだめかな〜兄貴い〜っ」

問題は、うっかり一緒に来てしまった、この愚弟のことだ。

マナーを重視する会合に、億泰までも座る羽目になるとは思わなかった。しかし、億泰も敷地内に踏み込んでしまった以上、ここで億泰だけ帰すことはマナー違反に他ならない。

頭を抱えたい気分なのを隠して、形兆は堂々たるしぐさで靴を脱いで、綺麗にそろえた。

人の家にあがる時はいつでも丁寧に。敬意を払って、靴を整える時も家主に尻を向けてはいけない。誰だってそうする。形兆もそうする。最低限の礼儀だ。

それは完璧な所作だった。

人と接する上での敬意の示し方、礼儀、マナー。形兆が両親から与えられたわずかなもののひとつだ。

形兆の父は厳格な男だった。

不動産会社の社長として社員と家族を守る、強い男だった。

——母が死に、経営難で莫大な借金を抱えて倒産するまでは。

虹村土地家屋株式会社。それが形兆の父が経営していた会社だった。

一九八八年。バブル絶頂期のさなか——突然経営が立ち行かなくなり倒産した、父の会社。

父が最後に取り引していた土地が、この村だった。

もし父がこの屋敷に入り、そこでなにかがあったのなら。

会社の倒産が仕組まれたことだったとするのなら——父の異形化が仕組まれていた可能性が浮上する。

吸血鬼に魂を売り渡し、化け物になった不死身の父親。それが陰謀によるものなら、やっとならば恨む対象が手に入る。

だからどうしたという話だ。

恨む対象ができたところで、きつと父はもう元には戻らない。しかし父のルーツを知ることは、形兆の人生になにかをもたらししてくれるはずだ。

だから形兆は帰るわけにはいかない。

屋敷の売り主に会い、話を聞く。

真実を探求する。真相を突き詰める。

それが、虹村形兆という年端もいかない少年に許された、運命にあらがう唯一の方  
法だったのだから。

だから形兆は、歩みを止めるわけにはいかないのだ。  
その先にどんな闇が続くとしても。